

明治時代の『源氏物語』

——「文学と国家」という視点から——

久富木原 玲

はじめに

明治時代における『源氏物語』をめぐる状況と、それが文学や社会の中で、どのような意義を担っていたのかという問題について「文学と国家」という視点から考える。

まず、とりわけ「文学と国家」にかかわる事項を3点挙げ、①②③の番号を付して示す。

- ① 1882（明治15）年の末松謙澄による世界初の『源氏物語』英語訳
- ② 1895（明治28）年の樋口一葉の『たけくらべ』
- ③ 1904（明治37）年の与謝野晶子による『源氏物語』講義開始

まず①は、明治15年に上梓された世界で初めての英語訳『源氏物語』である。これは日本が近代的国民国家として、すぐれた文化を持つ国であることを欧米列強に発信する意味を持っていた。②は明治28年の樋口一葉の『たけくらべ』で、『源氏物語』を深く読み込んで、物語の登場人物の心理や展開を活かして新しい作品を創造した。①とは対照的に国内の庶民の生活、特に社会の底辺に位置する主人公に焦点を当て、その周囲の人間像を描くことによって、近代国家における庶民の生活と社会のありかたを浮き彫りにしていく。次に③は、明治37年の与謝野晶子の『源氏物語』講義の開始である。これは後に現代語訳という果実を得て、一般の読者への普及に多大な貢献をすることになるが、注目すべきは、この同じ年に晶子は、日露戦争に反対する反戦詩「君死にたまふことなかれ」を発表している。晶子は歌集『みだれ髪』で、人間の「性愛」や「いのち」を全面的に肯定し謳歌したが、その精神は人間性を抑圧する「国家」に対しても真摯にまっすぐに向き合い、ついには天皇を直接、批判する言葉まで発していく。

このように①②③の『源氏物語』に関する3つの作品は、それぞれ異なる特徴と役割

を持つが、これらは決して無関係ではなく、互いに連動しつつ明治という時代とその変化を深く鋭く映し出している。即ち、①は明治初期の国民国家の若き外交官が日本の文化の質の高さを海外に発信するための使命感に燃えた行為であり、②は主人公が吉原の遊女になる運命の少女であることから、国家の制度が男性の側の論理によって成り立っていることを浮かび上がらせる。そして③の晶子の反戦詩は、男性もまた国家の制度に抗いようもなく縛られて生命が脅かされていることへの異議申し立てである。

明治初期は男性官僚の立場から世界へ発信するが、中期に入ると庶民の、最も弱い立場から「国民」としての人権など全く考慮に入れていない、国家の女性に対する制度を描き、後期には男性もまた否応なく戦争にかり出す国家に対して、女性が文学の力で立ち向かって行くという構図がある。ここには文学の視点が国家のレベルから、庶民のレベルへと移り、それらが特に女性の立場から発信されていることに特色がある。

【I】明治時代の『源氏物語』一年表による概観

1867(慶応3)年の明治天皇即位以後、第二次世界大戦敗戦に至る中で、「文学と国家」に関して特筆すべき事項が3点ある。以下の年表に、□を付して示す。

★年表★

1867(慶応3)年 明治天皇、即位。

1868(明治元)年 新政府、王政復古を各国に通告

1876(明治9)年 近藤芳樹『源語奥旨』(女子教育の立場からの皇国史観)

※密通も源氏が皇族出身として肯定。倫理の乱れは藤原氏に原因

① 1882(明治15)年 末松謙澄 最初の英語訳を上梓 17帖分

1889(明治22)年 大日本帝国憲法発布。

1890(明治23)年 教育勅語発布。

三上参次・高津楸三郎『日本文学史』(皇国史観に基づく)

『婦女雑誌』(『源氏物語』は天皇中心の物語)

1894(明治27)年 日清戦争

② 1895(明治28)年 樋口一葉『たけくらべ』『にぎりえ』

1897(明治29)年 樋口一葉死す

1900(明治33)年 藤岡作太郎、『国文学全史 平安朝篇』講義開始
(東京帝国大学)

★1904 (明治37) 年 日露戦争 (9月「君死にたまふことなかれ」)

③ 同年 与謝野晶子、『源氏物語』の講義開始 (新詩社)

③ 1904 (明治37) 年 晶子、『源氏物語』の講義開始 (新詩社)

1905 (明治38) 年 夏目漱石『我輩は猫である』

③′ 1907 (明治40) 年 晶子、『源氏物語』の講義開始 (自宅)

1908 (明治41) 年 漱石『三四郎』

1911 (明治44) 年 大逆事件の被告・幸徳秋水ら死刑。

1912 (明治45) 年 晶子、『新訳源氏物語』刊行 (一1913)。

1916 (大正5) 年 漱石死す (12月。50歳)

1925 (大正14) 年 アーサー・ウェイリー『源氏物語』の英語訳
治安維持法発布

1936 (昭和11) 年 二・二六事件

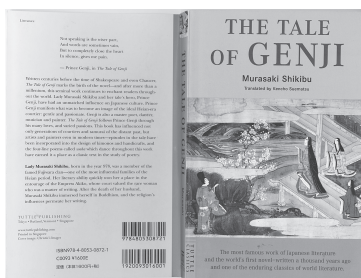
③′ 1938 (昭和13) 年 晶子、新新訳源氏物語刊行 (一1939)

1941 (昭和16) 年 太平洋戦争勃発

1943 (昭和18) 年 谷崎潤一郎、『細雪』を中央公論に連載するが掲載禁止となる。

1945 (昭和20) 年 日本、敗戦。

【Ⅱ】世界初の『源氏物語』の英訳は、日本人によってロンドンで上梓された。



図版 A 英訳表紙

(1) 末松謙澄という人物

翻訳者・末松は海外における日本文化の発信を目指した。末松は初代内閣総理大臣・伊藤博文に見出され、第一次から第四次までの伊藤内閣を主に大臣として支えた。この

間、伊藤の次女と結婚している。ここでその略歴を通して、末松がどのような状況の中で『源氏物語』の英訳をしたのかを見ていく。

末松が『源氏物語』の翻訳をするに至った直接の契機は、ジャーナリストとしての語学力を買われ、1878（明治11）年、外交官としてロンドンに赴任したことにある。末松は、引き続き1880年にケンブリッジ大学に入学し、1884（明治17）年に法学士号を取得し、この間に『源氏物語』の英訳を上梓した。彼は、その3年前には「義経＝ジンギスカン説」を唱える論文『義経再興記』を発表、その他、イギリスの詩人の作品の日本語訳なども手がけて、1886（明治19）年、第一次伊藤内閣の時に帰国する。

このように末松の主な目的はケンブリッジ大学で法学士号を取得することにあった。それは外交官として、あるいはその後の政府高官として活躍するための礎になったが、彼は法学だけでなく日本の伝統的な文学や文化に対する関心も持ち合わせており、帰国後は福地源一郎や外山正一らと共に演劇改良運動においても活躍している。また伊藤博文の意向で、明治天皇の歌舞伎見物（天覧歌舞伎）も実現させている。

こうしたことからわかるように、彼の文学、文化面における活躍には目ざましいものがあるが、1888（明治21）年には、法学修士号を取得し、翌1889（明治22）年には伊藤博文の次女・生子と結婚し、官僚として重要なポストを歴任する。公私ともに順風満帆で、この後、以下に示すように第四次伊藤内閣まで官僚や大臣として伊藤を支えるのである。

末松は1892（明治25）年、第二次伊藤内閣の成立時には法制局長官に就任し、その後貴族院議員となり、第三次伊藤内閣および第四次伊藤内閣では大臣を務める。（前者は逓信大臣、後者は内務大臣。それぞれ1898、1900年に就任）

しかし官僚や大臣としての仕事とは別に、注目されるべきことは、1904（明治37）年、日露戦争勃発時に伊藤博文の命により、日本にとって好意的な世論形成のため、イギリスでの広報活動を行なったということである。日露戦争に勝利した後、1906（明治39）年に帰国。海外での功績を認められ、枢密院顧問、翌年には帝国学士院会員になる。

帰国後は、1920（大正9）年に亡くなるまで、明治維新に関する歴史やローマ法の研究をまとめた著作を次々に上梓した。

(2) 世界初の『源氏物語』英訳の目的と意義

まず第1に、『源氏物語』の英訳は日本には古くから、きわめて高度な文学が成立していたことを海外に知らしめることを主な目的としており、鹿鳴館時代と時期的に重なる。

鹿鳴館時代とは鹿鳴館を中心に日本政府の高官や華族、欧米の外交団が宴会・舞踏会を催し、欧化主義を広めようとした明治10年代後半をいうが、それは不平等条約改正交渉を有利に進めるといった目的があった。これと1882（明治15）年の『源氏物語』の英訳上梓（英訳上梓）とは、連動しているであろう。日本国内では鹿鳴館の活動が行われ、海外では、末松謙澄による『源氏物語』という優れた日本文化の発信がなされたのである。

末松は、前述のように1904（明治37）年、日露戦争勃発時に総理大臣伊藤博文の命によって広報活動のためにイギリスに赴いているが、この『源氏物語』の英訳も、そのような活動の基礎になるものであった。

（3）世界初の『源氏物語』英訳は、徳川家に献上

① 明治政府の王政復古は『源氏物語』ではなく、『万葉集』を理想とした。

『源氏物語』が天皇に捧げられなかったのは、それが王朝文化を具現するすぐれた作品であるにもかかわらず、平安時代が藤原氏による摂関政治の時代であり天皇親政の時代ではなかったためである。衣冠束帯から軍服に着替えた明治天皇は、奈良時代とその前の天皇親政の神話の時代に「復古」したのであって、『源氏物語』の優美な貴族文化は国民国家のイメージにそぐわないものであった。

ゆえに明治政府は『万葉集』を近代的な国民を統合し、直接、支配する天皇像を具現化するものとして称揚したのである。『万葉集』こそは国民国家を統率する天皇と不可分の関係として機能する、きわめて重要で理想的な文学であった。

② 明治政府における『源氏物語』の両義性

『源氏物語』は世界に誇る文学であるが、同時に男女の恋愛や密通事件などの「乱れた」貴族社会を描く。ゆえに海外に対しては自国の文化としての誇りを以て発信するが、逆に国内に対しては明治国家の標榜する理想とはかけ離れていたのである。そこで国内的には貴族文学としての『源氏物語』ではなく、「素朴な感動を雄渾な調べで真率に表現」し（注2）、そのような歌によって国民と天皇が直接、繋がることのできる国民歌集『万葉集』を民族が誇るべき文学として位置づけたのであった。

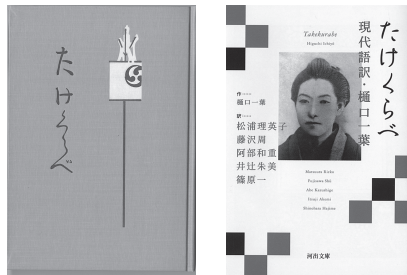
ちなみに現代の皇室による「歌会始」もまた、歌によって天皇と国民が相和すことを具現する装置であり明治国家の路線を踏襲するものである。

このようなわけで末松謙澄という外交官による世界初の『源氏物語』の英語訳は、明治政府から発信されることはなかった。『源氏物語』は高度な文学性ゆえに、海外に対しては高度な日本文化が存在したことを喧伝するものとして選ばれたが、国内向けには

むしろ隠しておきたい作品だったのだといえよう。

【Ⅲ】樋口一葉『たけくらべ』出現の意義

—『源氏物語』の本格的な継承と、新たな文学の創造—



図版 B 『たけくらべ』表紙 2 例

まず、本作品のあらすじを述べる。

明治初期の東京の下町が舞台。14歳の美しく快活な少女「美登利」がヒロイン。彼女は、15歳のお寺の息子「信如」に淡い恋心を抱いている。だが、ふたりの周囲の子どもたちは2つのグループに分かれて反目し合っており、「美登利」と「信如」は別々のグループに属している。

8月の夏祭りの夜、「信如」のグループの暴れ者の少年が満座の中で「美登利」に暴言を吐き、さらにその額に「泥草履」を投げつける。夏祭りの場になかった「信如」は、この事件を聞いて心を痛めるが、祭りの翌日から「美登利」はそれまでの快活さをすっかり失って人が変わったようになって家に引きこもってしまう。親しくしている同じグループの13歳の「正太」が訪ねて行っても、布団を被ったままヒステリックな態度を取るだけである。

西の市を迎えた日、「美登利」は成人女性の髪型である高島田を結び、きれいだと周囲の人々に賞賛されるが、本人は「大人になりたくない。大人になるのは嫌なこと」と言ってふさぎ込んでいる。「美登利」は実は、大黒屋という吉原の遊女屋に住み込みで働いている両親の娘で、初潮を迎えて、いよいよ遊女になる時を迎えたのだった。

一方、「信如」は僧侶の学校に入学が決まり、町を離れることになった。「信如」が町を発つ朝、「美登利」が暮らす大黒屋（遊女を抱える家）の「格子門」に一輪の「水仙の作り花」（造花）が挿してあり、「美登利」はそれが「信如」からのものとは知る由も

なかったが、何となくやつかしい思いで手に取るのだった。



図版C 切手『たけくらべ』の「美登利」

- ① この小説の特色と意義は、『源氏物語』の精緻な読みに基づきつつ、しかもあらたな作品を創造した点にある。
まず全体的な特色としては、平安時代の貴族の世界を明治時代の庶民の暮らしに移して当時の社会風俗を活写することが挙げられる。具体的には、葵祭における六条御息所の車争いの場面を明治時代の東京の下町の夏祭における争いに活かしている。さらに『源氏物語』では、この車争いのために憂悶を深めた六条御息所が光源氏との愛を清算して伊勢に下るが、その葛藤と別れの場面を思春期の子どもたちの世界に移して描くのである。
- ② 『たけくらべ』の特色としては、登場人物が下町の庶民だということに加えて、その庶民に金銭で買われる存在（遊女・女郎）となる運命を持つ人物を主人公に据えている点にある。
- ③ さらに主人公は子ども（少女）であり、彼女をめぐる主な登場人物もまた子どもたちである。社会の底辺に位置する少女とその周囲の子どもたちが、大人の世界や制度・職業に如何に取り込まれ縛られているか、明治という時代を底辺の子どもたちの視点から描く。

④ 「紀州訛り」の主人公

・ここでは地方で生活が成り立たなくなった親が東京に流れてきて、遊女屋に住み込みで働き、その上、娘たちを遊女に売る。封建制度が崩れて土地に縛られずに移動可能になった明治時代には、地方から職を求めて都会に流入する人々が増えたが、そのひとつの典型が描かれているのである。ここには故郷に定住する生産者ではなく、根無し草としての都市生活者あるいは労働力を売り、娘の体を売って生活する親たちの姿があり、国民国家とは名ばかりの「遊女」という、到底、「国民」にはなれない、また「国民」としての権利も全くない少女の未来が映し出されている。

⑤ 「吉原」は国家公認の制度（第二次世界大戦の敗戦前後まで）

・国の制度の中で子どもたちが大人になった時、お互いに身体を「買う・買われる」という関係に組み込まれていくが、そのことを身を以て知ることになる「美登利」は登場した時ははつらつとした「若紫」の姿そのものであるが、夏祭の夜、公衆の面前で罵倒されてから人が変わったようになる。そして「大人になりたくない」とつぶやくばかりでふさぎ込んでしまう。「大人の社会を忌避する」彼女の抵抗は母親にさえ理解されない。その「大人の社会」とは、国家の制度そのものに外ならない。ここには「国家」対「個人」、あるいは「子ども」対「大人」との関係性がくつきりと浮かび上がる。即ち、個人（特に女性）が自分の意志とは無関係に、あるいは意思に反して親までが共犯者となって国家の制度に人身御供のように捧げられる。「美登利」の憂悶する姿を通して、国家というものの非人間的な面を映し出す。

⑥ 一方、『源氏物語』には人間の心理への洞察が普遍的な形で書かれている。そのような姿勢が『たけくらべ』の最も重要な場面で活かされている。具体的には「美登利」がプライドを傷つけられて精神的に追い込まれていく姿は、葵祭で乱暴狼藉を受けた元皇太子妃・六条御息所が精神的に追い詰められて生霊になる場面を意識しながら描かれる。六条御息所という皇太子妃であった最高級の貴族女性の煩悶を、遊女にならざるを得ない底辺の少女の立場へと転換しているのであり、時代が違って、また社会的な身分が異なっても、プライドを傷つけられた人間の心の痛みという普遍的な人間の心理をつかみ出しているのである。



図版 D 賢木巻・野宮の別れの場面

⑦・源氏取りと思春期の淡い恋のリリズム

もうひとつ、六条御息所を意識した極めて印象深い場面として「美登利」と「信如」の淡い恋の結末を描く場面がある。

「信如」は町を離れる時、美登利に「水仙の作り花」を届けるが、なぜ「水仙の作り花」なのかと言えば、『源氏物語』賢木巻の場面を下敷きにしているからである。娘の斎宮に従って伊勢に下る決心をした六条御息所を光源氏が訪ねる条で、彼は都から遠く離れた伊勢神宮という神域に旅立って行く御息所に「榊」の枝を捧げたのであった。「榊」は常緑樹で枯れることのない植物であるから、いつまでも「枯れない」つまり「心変わり」しないというメッセージを伝えたのである。

『たけくらべ』は、これをふまえて「信如」の、美登利への一途で変わることのない思いを「水仙」の「作り花」に託した。「作り花」（造花）に永遠に枯れないという意味を込めたのは、まさしく光源氏が六条御息所に示した精一杯の心情と呼応する（注3）。

『たけくらべ』は、社会の底辺に位置する子どもの視点から国家の仕組みや人間の切実な心の動きを描くが、それは『源氏物語』が内包している視点あるいは問題意識とも響き合う。身分の上下を問わず、どうすることもできない制度や共同体における人間関係、あるいは限りなく低い位置からの目線、さらに権力や国家との関係など『源氏物語』が描こうとしたテーマを明治時代に活かしたのである。

【IV】 与謝野晶子一詩によって国家に異議申し立てをする

- ① 1904（明治37）年「君死にたまふことなかれ」一日露戦争時の反戦詩
『源氏物語』の講義開始と同年。
- ② 1901（明治32）年『みだれ髪』（晶子の歌集）と反戦詩（新詩社より上梓。）
 - ・性の解放・男女の官能的な恋を高らかに歌いあげる。→人間性の回復



図版 E 『みだれ髪』

（これは「王政復古」した明治政府が排除した要素）

- ・1904（明治32）年から『源氏物語』を数回にわたって講義し、初めての『源氏物語』の現代語訳を手がけるが、これと晶子の反戦詩は、官能的な恋愛を肯定し、さまざまな形の恋が描かれる『源氏物語』への傾倒と連動している。明治後期に入って、国家が富国強兵を整え庶民もまた外国との戦争に沸き立っている時、国家の戦争よりも肉親の個人の「いのち」を重視する詩によって国家による戦争に異議申し立てをするのである。

この時、末松謙澄は伊藤博文総理大臣の命を受けて、ヨーロッパに対して日露戦争における日本の立場を広報するための任務を負って2年ほど従事する。

晶子は天皇＝国家に対して国民の「いのち」の大切さを訴え、末松は国家の戦争を有利に導くための活動をしていて対照的である。

国家とその戦争遂行に尽力する末松に対して、晶子の方は「君死にたまふことなかれ」の中で、戦争へとかり立てる天皇を批判（以下の詩の下線部分）をする。

ひとりの姉として、弟の「いのち」を案じるがゆえの、きわめて人間的で普遍的な言葉を紡ぎ出す中から、天皇を告発する言葉が発せられていく。

「君死にたまふことなかれ」

ああ弟よ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ。
末に生れし君なれば
親のなさはまさりしも、
親は刃^{やいば}をにぎらせて
人を殺せと教へしや、
人を殺して死ねよとて
廿四までをそだてしや。

—中略—

君死にたまふことなかれ。

すめらみことは、戦ひに

おほみづからは出でまさぬ、

かたみ
互に人の血を流し、

けもの
獣の道に死ねよとは、

死ぬるを人の誉とは、

おほみこころの深ければ

もとよりいかで思^{おぼ}されむ。

—以下略—（詩の全文は、【補足3参照】）

【むすび】

明治10年代、20年代、30年代における『源氏物語』関連の著作や営為を、「文学と国家」という視点から眺める時、それぞれ際立った特色を示す。10年代の英訳は若き外交官がロンドンの地で国際社会に対して日本文化を発信し、20年代の一葉の作品は、国民国家としての近代国家が誕生してもなお、社会の底辺で両親から遊女として金銭で売買される少女と彼女をめぐる周囲の子どもたちや大人社会のありかたを鮮やかに映し出す。ここには「国民国家」における「国民」とは何か、「国民」は、いったいどこに

存在するののかという鋭い問いかけを読み取ることができる。そして30年代に入ると、明治政府は日清戦争に勝利して、いよいよ富国强兵策を進め、国家的大事業としての日露戦争に突入していく。その時、『源氏物語』の講義を開始した晶子は、一方では反戦詩を発表し、天皇に対峙する形で批判の言葉を向ける。圧巻は晶子が実の弟と「天皇」とを対置して、「すめらみことは、戦ひに おほみづからは出でまさね」とうたう部分であろう。天皇と一兵卒を同じ人間なのだとする感覚がなければ、こうした表現は出て来ようがない。晶子の人間賛歌の精神は、国家による戦争時には、国家や天皇への鋭い批判の言葉となってあふれ出すのである。

ちょうどこの頃、世界初の『源氏物語』英訳者・末松謙澄は、伊藤博文総理大臣より日露戦争における日本の立場をヨーロッパ諸国に訴えるために広報活動を命じられ、その功績が認められ、枢密院顧問、次いで帝国学士院会員になっている。

末松と晶子の日露戦争への向き合い方は対照的であるが、それは『源氏物語』をどのように読んだかという違いでもある。末松は、日本文化の高度な達成を世界に発信したが、晶子にとって国威発揚の文化として高度かどうかは問題ではなく、『源氏物語』がさまざまな人間の喜び、悲しみ、苦悩を味わいつつ、時には反道徳的な行動を取りながらも人間らしく精一杯生きていた、その人間の営みにこそ愛おしさを抱いていたのだと考えられる。それは恋や性愛を高らかに歌いあげた『みだれ髪』の世界と連動している。

そして一葉はナイーブな思春期を描いて見事であった。それぞれの子どもたちの生活を描きながら、国家や社会の仕組みや不条理、特に少女・女性における不条理をあぶり出すが、その小説世界を効果的に支えるのが『源氏物語』なのであった。一葉は、声高に叫ぶことはしない。あくまでも小説の登場人物が置かれた状況と行動・心情を生き活きと描くことに徹する。だが、そこには国家のありかたが影絵のように映し出され、制度に縛られた人間の悲しみがにじみ出て、文学の計り知れない魅力と可能性を示すのである。

『源氏物語』も同様で、さまざまな人間のさまざまな喜び悲しみを描きつつ、当時の時代や社会のありようを映し出している。一葉こそは『源氏物語』の物語性と精神性、抒情性を最も深く受け継ぎつつ、明治時代における国家や制度の縮図を小説の中に構築したのであった。

一葉と晶子は、女性の立場、庶民の立場、人間の立場から、国家のありかたとその矛盾を浮かび上がらせ、あるいはこれに対する異議申し立てを行った。彼女たちにとって『源氏物語』は単に雅な古典ではなく、現実としての近代社会を照らし、その中を生き抜くためのものだったのである。ここに古典が発揮する「底力」がある。古典は、楽し

み、学ぶだけでなく、現状に生きる自分と向き合い、社会と向き合うことに思いを致すことであり、一葉・晶子が問いかけ、突きつけているのは、このことなのだと思う。

【注】

- 1 川勝麻里『明治から昭和における『源氏物語』の変容—近代日本の文化創造』和泉書院、2008年。
- 2 品田悦一『万葉集の発明 国民国家の文化装置としての古典』新曜社、2001年。
- 3 久富木原玲『「たけくらべ」—「水仙の造り花」の謎を解く—』『源氏物語の変貌—とはずがたり・たけくらべ・源氏新作能の世界』（おうふう、2008年）。
- 4 注3参照。

【図版解説】

- A 末松謙澄英語訳のペーパーバック TUTTLE PUBLISHING 1974年版
- B 左は『たけくらべ』初版復刻版新選名著復刻全集近代文学全集1976年、右は一葉の肖像画入り現代語訳河合文庫、2004年
- C 『たけくらべ』の切手（鏗木清方筆・京都国立近代美術館蔵）
- D 『源氏物語』賢木巻・野宮の別れの場面 『絵本 源氏物語』（承応三年版、東京大学文学部国文学研究室蔵）貴重本刊行会、1988年
- E 与謝野晶子『みだれ髪』の表紙新選名著復刻全集近代文学館、1974年

【補足1】『たけくらべ』について

- a 政府や政治とは無縁の庶民、明治時代初期の東京の下町の庶民の暮らしを描く。
- b しかも、中心になるのは思春期の子どもたち。小説が子どもを主人公にするのは、大正時代の児童文学成立以降。
- c 5人の子どもたちは、それぞれが子どもながらに大人の社会や職業を背負って生活しており、そのまま大人の世界の縮図＝明治という庶民の生活の縮図。
- d 物語の主軸をなすのは、「美登利」と「信如」という思春期の淡い恋。
→実は、幼なじみの男女の恋は、古典にそのルーツ。

●『伊勢物語』23段「筒井筒」の段

『源氏物語』は、この『伊勢物語』の話を活かして光源氏の息子と姪（「夕霧」と「雲居雁」）の幼なじみの恋を描き、長編物語に位置づけた。

『たけくらべ』は千年後に、これらの古典を「小説」として新生させた。

e 「美登利」は『源氏物語』ヒロイン若紫を意識（小説の文中に「若紫」と記されている。）

f だが、その愛らしく快活で社交的な「美登利」が夏祭りを境に別人のように、家にひきこもりヒステリー状態に変貌する点こそが、この小説のポイントで、高貴な元皇太子妃・六条御息所の苦悩が庶民によって金銭で売り買いされる最も底辺の遊女「美登利」へ移し替えている。

g 僧侶となる「信如」は、遊女となる「美登利」と一生、逢うことはないであろう。
・光源氏は、常緑樹で枯れない「榊」によって「永遠の愛」を伝え、「信如」は「水仙の作り花」によって「永遠の愛」を伝える。

※「水仙の花」=江戸時代から「若衆」にたとえられた。（ギリシャ神話でも、ナルシス=少年）（注4）

【補足2】新詩社は、詩歌結社のひとつ。1899（明治32）年、与謝野鉄幹が短歌革新を目指して結成。翌年4月、『明星』を機関誌として創刊。浪漫的傾向で短歌史、近代詩史に一時代を築いた。同人に北原白秋、木下杢太郎、石川啄木らがいた。

【補足3】与謝野晶子「君死にたまふことなかれ」

（旅順の攻圍軍にある弟宗七を歎きて）

ああ弟よ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ。
末に生れし君なれば
親のなさはまさりしも、
親は刃やいばをにぎらせて
人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねよとて
廿四までをそだてしや。

堺の街のあきびとの
舊家（きうか）を誇るあるじにて
親の名を繼ぐ君なれば、
君死にたまふことなかれ。
旅順の城はほろぶとも、

ほろびずとも、何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家の習ひに無きことを。

君死にたまふことなかれ。
すめらみことは、戦ひに
おほみづからは出でまさね、
かたみ互に人の血を流し、
けもの獣の道に死ねよとは、
死ぬるを人の誉とは、
おほみころの深ければ
もとよりいかにおほ思されむ。

ああ弟よ、戦ひに
君死にたまふことなかれ。
すぎにし秋を父君に
おくれたまへる母君は、
歎きのなかに、いたましく
我子を召され、家を守り、
やす安しと聞ける大御代も
母の白髪は増さりゆく。

のれん暖簾のかけに伏して泣く
あえかにわかき新妻を
君忘るるや、思へるや。
十月（とつき）も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ。
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき。
君死にたまふことなかれ。

[本文は、『定本与謝野晶子全集』第九卷（雑詩四十章）、講談社、1980年]

【付記】

本稿は、2016年10月18日—20日に開催されたブラジル・サンパウロ大学・日本文化研究所主催の国際シンポジウム「夏目漱石とその時代」における同題の講演（10/19）を基に、一部改稿したものである。講演当日は、漱石に関しても言及したが、本稿では、これを割愛した。

このシンポジウムの企画・運営に当たられたサンパウロ大学日本文化研究所所長マダレーナ・ハシモト・ナツコ教授、ジュンコ・オタ教授、またポルトガル語への翻訳の労をとって下さったネイジ・ヒサエ・ナガエ教授に心から感謝の意を表したい。また当日、その翻訳のパワーポイントを時間も順序も自在に変えてしまう私に合わせて臨機応変に対応してくれた大学院生のマルシオ・ハヤシさん、2年前に愛知県立大学日本文化学部で留学し、当日は司会を務めてくれたジュリオ・セザール・ナシメントさんのふたりにも、お礼申し上げる。（マルシオとジュリオは、私が担当した源氏物語講義の受講生。私は、独立行政法人国際交流基金より、2016年度サンパウロ大学大学院客員教員として派遣され、その滞在期間中に、上記の国際シンポジウムが開催された。）